

ネットワーク時代の今を追う
<http://www.wakabayashi.com/internetroad21/>

知的公共圏をめぐる果てしなき闘い もうひとつのフリー百科事典＝ シティゼンディアムの誕生

エリツィンとレーニン

2007年4月23日、ロシア連邦のエリツィン前(=初代)大統領が死去した。彼の葬儀が執り行われたのは、モスクワのクレムリン宮殿の南西方向に徒歩で5分ほどのところにある救世主キリスト大聖堂である。

この大聖堂は19世紀初め、ナポレオン戦争の勝利を記念して建立が決まった由緒ある建築物である。最終的完成は1883年。だが、1931年、スターリンは大聖堂を爆破。跡地に「ソビエト宮殿」の建設を計画した。ソビエト宮殿は屋上に巨大なレーニン像がそびえ立つ高さ400メートル以上の世界一の建築物となるはずであった。しかし、戦争で建設は中止。ソ連崩壊後の2000年、爆破された大聖堂は元あった場所に再建されたのである。

数奇な運命を辿った救世主キリスト大聖堂は、ソ連崩壊の立役者だったエリツィン氏の葬儀の場所として、ふさわしいと言えるかもしれない。一方、ソビエト宮殿の大レーニン像は実現しなかったのだが、大聖堂の北300メートルほどのところ、クレムリンのすぐ裏手にいまだに堂々とレーニンの名前がついた建物がある。「レーニン図書館」である。

レーニン図書館の現在の正式名称は「ロシア国立図書館」、ソ連時代には「レーニン名称ソ連邦国立図書館」(通称

モスクワの「レーニン図書館」
 (2007年3月、筆者撮影)



は「レーニン図書館」と称していた。今も、地下鉄の駅名は「レーニン名称図書館」のままであり、図書館正面のレリーフも「レーニン」を残したままである。

図書館は人びとの持つ知識を構造化し展開してゆく有力な社会装置のひとつである。「レーニン図書館」の蔵書数はおよそ1,700万冊、日本の国会図書館の規模の2倍に相当する。このような装置は一朝一夕に構築できるものではない。共産主義時代に、長年にわたりソビエト社会の知的公共圏を牽引してきた「レーニン図書館」を現代ロシアが克服するには、なお多大な時間と知的資源の投入を必要とするであろう。

ウェールズとサンガー

図書館とならぶ有力な知識装置である百科事典は、諸知識の概要を整理し参

照し普及させる役割を歴史的に担ってきた。英国のブリタニカ大百科や日本の平凡社の百科事典はその代表的なものである。

前回紹介したネット上のフリー百科事典・ウィキペディアは、2001年、ジミー・ウェールズとラリー・サンガーの二人によって創設された。

しかしながら、万人が作り万人が利用するという高い理想を掲げたウィキペディア事業が本格化してゆくにつれて、専門的知識・資格を持つ専門家の役割をめぐって、ウェールズとサンガーの考え方の違いが表面化した。サンガーの考えでは、万人の参加は良いことだが、各項目の編集については専門性の高い人びとにより強い役割を与えなければやがて取捨のつかない混乱状態に行き着いてしまうというのだ。

創設者二人の亀裂は短期間に拡大し、



シティゼンディアムの創設者、
ラリー・サンガー
<<http://www.wikipedia.org/>> より

関連情報

- 「レーニン図書館」(ロシア国立図書館)
<<http://www.rsl.ru/index.php>>
- 日本の国立国会図書館
<<http://www.ndl.go.jp/>>
- マルクス、漱石、熊楠も利用した大英図書館
<<http://www.bl.uk/>>
- 専門家が主導するシティゼンディアム
<http://en.citizendium.org/wiki/Main_Page>

創設の翌年の2002年にはサンガーはウィキペディアを去ってしまう。ウェールズの方も態度を硬化させ、そもそも「共同創設者」などというのは言い過ぎであり、事業主としてのウェールズから見れば、サンガーは所詮「雇われ人」に過ぎないと言う。

サンガーからすれば、主任編集者としてウィキペディアの爆発的發展への礎石を構築したのは自分なのだという自負もある。一時は、ウィキペディアにおける「サンガー」の項目の重要部分が消滅するという事態にまで事態は悪化した。しかし、現在の記述では二人は「共同創設者」という線で落ち着いている。

ウィキペディアを去ったサンガーは、模索すること足かけ5年、2006年9月、ついに独立してウィキペディアの理想を実現することを宣言する。もうひとつのウィキペディア、「シティゼンディアム(citizendium)」の誕生である。

シティゼンディアムの誕生

シティゼンディアム(citizendium)はシチズン(citizen)とコンペンディアム(compendium)とを組み合わせた造語である。意味は「市民がきちんととりまとめたもの」(The Citizen's Compendium)である。サンガーはこの言葉の発音にこだわりがある。中央の“zen”を強調してこれを「ゼン」と読ませるのである。よって全体の読みはシティ「ゼン」ディアムとなる。迷いを断つ「ゼン(禪)」にかけているのであろうか。

シティゼンディアムは、ブラウザ上

の共同作業の仕組みである「ウィキ」を利用するフリーな百科事典を目指している点ではかつての「同志」ウェールズ率いるウィキペディアと変わらない。異なる点は「信頼性」を前面に打ち出していることだ。信頼性を担保するために、「専門家によるゆるやかな監督」を採用している。さらにウィキペディアと異なり徹底した「実名主義」をとる。匿名による参加を認めていない。

2007年3月25日、シティゼンディアムは試験段階を終えて、公開された実際の作業段階に入り、「ベータ版」の開始を宣言した。サンガーによれば、項目は1,000を超え、寄稿者は数百名を数えるが、編集者たちがその名に値すると判断するまでは「百科事典」とは呼ばないという。

知的公共圏とデモクラシー

デモクラシー(=人民による支配)の実現のためには、知識は一部の特権階級が所有するものではなく、万人が共有している必要がある。ただし、この理想は絶えざる文化運動としてのみ実現可能なものである。ネット上のフリー百科事典の試みは、このような文化運動のひとつとして捉えることができる。

知識の獲得において、専門家の果たしている役割が重要であることは言うまでもない。しかし、専門家の役割は常に両義性をはらむものである。それは専門家の持つ特権と関係がある。専門家は知識



シティゼンディアムのロゴマーク
<http://en.citizendium.org/wiki/Main_Page>

を獲得するためのさまざまな道具立てを特権的に所有している。専門家も生きた人間であり、こうした特権を擁護したいと考えても不思議ではない。さらに、こうした特権擁護のために、そして自分たちのスポンサーに仕えるために、知識そのものを操作したいと考えてもおかしくはない。

専門家の役割を重視するサンガーも、彼らの役割は権威的でトップダウンのものであってはならず、あくまで助言者・支援者に徹するべきだと述べている。専門家にこそ要求されるべき「高い自覚」という考え方がそこにはある。

ではこうした「高い自覚」は何によって担保されるのであろうか。それは万人の参加によるほかはないであろう。そもそも知識そのもののつきない源泉は、万人の感覚的経験にあるのだから。

「レーニン図書館」もかつては、少なくとも建て前の上では、「人民による支配」を支援する役割を担っていたはずである。だが現実には「人民を支配する」象徴になり果て、巨大な墓標と化してしまった。知的公共圏における特権の否定・克服は、デモクラシーそのものの実現の鍵を握る人類永遠の課題である。〔完〕

(わかばやし・いっぺい)